

平成25年（ワ）第38号等「生業を返せ，地域を返せ！」福島原発事故原状回復等請求事件等

「生業を返せ、地域を返せ！」福島原発事故原状回復等請求事件等

原告 中島 孝 外


被告 国、東京電力株式会社

意見陳述書

2014年5月20日

福島地方裁判所民事部 御中

氏名

小室 さとみ 

(原告番号 T-1433)

1 自己紹介

私は、群馬県で生まれ、結婚を機に、現在の住居で、夫の実家である宮城県白石市に移り住みました。

原発事故のあった日も私と夫と当時高校生の息子と小学生の娘とともに、白石市で生活をしており、現在は娘と二人で暮らしています。

仕事は民主商工会で主に白石市や丸森町担当の事務局員をしています。民主商工会では、中小業者の営業や暮らしなどの相談に乗っています。原発事故後は原発事故による営業上の損害賠償の請求などの相談も受けています。

2 事故後の暮らしについて

(1) 生活状況について

原発事故が起こるまで、被ばくは戦争や兵器に関する事で、私たち自身が被ばくするとは全く考えていませんでした。原発や放射能の知識はほとんどありませんでしたし、まして、福島第一原発のことを心配したり、対策をすることは全く考えていませんでした。

そのため、原発事故があったとき、ラジオでは、小雨でも外には出ない方がいいとか、放射能や被爆についての情報が流れていて、私はそんなに簡単に被ばくしてしまうのか、放射能は体に残ってしまうのかと考えて、大変なショックを受けました。食べ物や水についても放射能の危険があることを知りました。

以前から担当地域の方から野菜をもらって食べていましたが、原発事故当時、被ばくの危険性を考えると、食べたくはありませんでした。特に担当の丸森町の方から頂いた野菜は食べずに捨ててしまうことがあり、とても申し訳ない思いをしました。

また、事故前までは、家の周りや丸森町で山菜やたけのこを取っていました。山での放射線量が高いと聞いてから、家の前のあぜ道に出ているフキノトウを事故後採らなくなりました。越河の辺りでは米から基準値を超える線量が出たことが報道され、地域の農業は大きな打撃を受けました。

私のまわりではお風呂に薪を使用している家はいくつもありますが、薪を燃やすと放射性物質が濃縮されて危険であるため、やめるように言われています。ただ、ボイラーに替えようにも費用の面で替えることができない人も多くいます。薪を燃やしているところに子どもが近づかないだろうかと心配になります。灰の仮置き場が決まらないため、燃やした灰を入れたビニール袋が破けて被ばくしないだろうかと不安です。

(2) 避難について

原発事故の後、自宅や自宅周辺の放射線量が増加しました。白石市での説明会

にも行き、様々な本を読みました。病院の医師による白石市主催の説明会では、白石には影響がないと言っていましたが、説明の内容や数学的基準がみんな違い、不安はどんどん募りました。

子どもたちへの影響を考えて避難を考えました。しかし、自宅周辺の線量が今すぐに避難しなければならないほど高いとはいえ、私の周りに避難した人がいるとは聞いていません。子供たちも友人が誰も避難していないので避難したくないようでした。避難慰謝料もなく、新しい土地に移っても就職先が見つかるかわかりません。これから子供たちの進学費用もかかりますし、生活が成り立つかという不安が大きく、避難できませんでした。しかし、福島では徐々に影響が出てきているという話を聞くと、子どもたちへの将来的な健康被害については今でも不安です。

(3) 夫の自死について

私は、原発事故前は家族4人で生活をしていましたが、原発事故のあった日から約1年後、夫は自死しました。夫は元々うつ病に罹患していましたが、原発事故が起きる前までは回復傾向にありました。原発事故後、夫は様々な本やネットでいろいろな情報を熱心に集めて、私でも過剰ではないかと思うぐらい、子供たちへの放射能の影響を気にしました。夫は「こんなところに子供たちを置いていけない」といって、北海道に移住するために、夏に北海道の市役所の臨時職員の試験を受けたりもしていました。

そんな中、夫は突然で仕事をしているときに亡くなりました。原発事故だけが夫の死の原因だとは思いませんが、原発事故による放射能汚染は、夫のうつ病を悪化させる一つの要因となりました。原発事故がなければ夫は今でも私たちと生活していたと思います。

(4) 仕事について

事故後、私は仕事で原発関係の相談を受けるようになりました。出荷停止となった椎茸原木の農家や直売所の方などから、線量が検出されなくても売れないと

いう風評被害の相談が多いです。民商では損害賠償の取り組みをしていますが、宮城県であることを理由に、福島の人と同じような状況でも賠償が認められないことが多いのです。宮城県は、津波の被害が大きいことからか、原発事故への積極的な補償はなく、まるで全く被害がないかのように扱われています。線量の高い丸森町の住民が必死に頑張っ、ようやく見舞金の交付や甲状腺検査が行われるようになりましたが、それ以外の地域では実施される様子はありません。

福島県ほど線量が高くないことから、県民も被害があると訴えると、かえって放射能に汚染されていると思われて風評被害が広がるのではないか、被害があるという話自体してほしくない、という人も少なくなく、大きな声をあげることが難しいです。実際にある被害を話そうとしても、押さえこまれます。しかし、被害は確かにあるのです。本当に原発事故によって困っていても救済を求めることもできない。これも大きな被害です。

3 東電・国に対する思い

私は国や東電が、津波や地震によって原発がどうなるか、原発がどれほど危険か十分に知っていたはずなのに、私たちに何の情報も与えてこなかったことが許せません。そして、こんな事故が起こったのに原発を再稼働しようとしていることが一番許せないのです。

私は、事故後に様々な情報を得て、色々なことに不安を感じています。日本では地震が多く、大きな地震も発生します。身近なところでは女川原発を始め、国は原発を再稼働させると言っています。女川原発はかろうじて一基のディーゼルエンジンが生き残っていたので事故には至りませんでした。今度地震が起こったらどうなるかわかりません。女川原発まで爆発したら私たちは逃げようがありません。ここに住んでいる私たちとしては、住み慣れた今の住居や生活を捨ててすぐに避難するという事は難しいのです。

放射能の子供への影響を一番に心配しています。私たち親の世代にとってはそれほど影響がなくても、今成長している子どもたちにとっては、放射能の影響が大

きいことを学びました。今食べている地元で採れた食べ物や水が安全かを考えると、子供に対してその食べ物や水を与えることには非常に不安と心配があります。

以前はこのような不安を感じて生活することはありませんでした。放射能は、長い期間影響を及ぼします。自分の故郷の汚染や生活の破壊がなかった頃に戻ることはありません。体にも土地にもずっと残ります。原発事故が起きれば、簡単にそんな状況になってしまいます。

国や東電には、これからの子どもたちに安心して暮らせるようにしてもらいたいです。そのためにはすべての原発の再稼働は絶対にやめてほしいです。きちんと原発事故で困っている人たちに賠償してほしいと思います。